この素晴らしい魔法世界に祝福を！

36ヶ崎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９９２年の８月、佐藤家の長男の和真は不思議な出会いを果たす。

青い髪の、青いローブという少々まともではない女性に勧められて、ホグワーツ魔法魔術学校に通うことに。

そこでは、魔法使いなんかよりも騎士の方がよっぽどお似合いの金髪のドＭ魔女や、魔法使いの中でもとりわけ痛々しく尚且つ名前のおかしい魔女などと出会うことに。

そして、生まれながらに英雄として名高いハリーポッターと出会い、カズマの運命は狂っていく――

最近、ハリーポッター　にハマったしまったので勢いで書いたものです。基本はハリーポッター　の世界にこのすば時空をぶち込んだものですので、全体的にギャグとなります。

目次

Prologue ―――― 1
このダイアゴン横丁に魔法の杖を！ ―――― 5
このホグワーツ特急に紅魔族を！ ―――― 10

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

「カズマ・サトウさん……いえ、日本名なのでサトウ・カズマさんでしょうか。貴方をお迎えに上がりました。貴方には、ホグワーツ魔法魔術学校で学ぶ義務があるのです」

自室でゲームをしている中、俺は唐突にそんなことを告げられた。

突然のことで何のことだが分からない。

ただ、目の前の女性が普通の人間ではないということが一目見て分かった。

テレビで見るようなアイドルのような可愛さとは一線画した、人間離れした美貌。

淡く柔らかな印象を与える水色の長い髪。

その水色と合わせた、地面にまだ届くような水色のローブ。おまけに、片手には杖らしきものが握られている。

……はっきり言って、異常だ。

突如として、俺の部屋に現れたことも異常ではあるが、ＴＨＥ・魔法使い！　みないな格好をしておきながら、人の家で堂々としているこの人の感性も異常だ。

「ねえ？　その変なものを見るような目やめてくれないかしら？」

……おっと。顔に出ていたようだ。

しかし、どうみてもこの女性の格好が異常なのだ。俺の反応は正しいと言ってもいい。だが、彼女の言葉に一つ気になることがあった。

「……一つ聞いても？」

俺の言葉に女性が頷く。

「どうぞ？」

「その……先程、魔法だとか魔術だとか、聞こえた気がするんですけど……」

確かに言っていた気がする。

魔法や魔術と言った類はないのだと、ゲームや本の中のみのものだとは知っているが、やはり気になるものはなるのだ。

「ええ、言いましたね。もし、信じられないようなら見せましょうか

？」
その言葉に俺はコクコクと頷く。
「仕方ありませんね……。『クリエイト・ウォーター』！」
「み、水だ……！　水が出てる！　えっ、どっから……？」
「プークスクス！　こんな簡単な魔法に驚いてるとかマグルだとしても超ウケルんですけどー！」
俺がどこからともなく、湧き出た水に驚いていると、目の前の女性はバカにしたように吹き出ししてくる。
どうしよう。明らかに年上だけど、グーで殴りたい。
……いや、待て。落ち着け。それよりも、俺は大変なことに気づいてしまった。
俺は震えるような声で尋ねた。
「つ、つまり……俺も、貴女のような魔法が使えると？」
「ええ。ですから、こうして私が迎えに来たわけです」
その、どこか馬鹿したような言い方に、怒りたいのをぐっと堪える。
「ま、待ってくれ！　お父さんもお母さんも、俺にはそんなこと一言も……」
「そりゃあ、貴方の両親は両方ともマグル――つまり、非魔法族ですからね。貴方が魔法使いであることなんて知りませんよ」
俺はその言葉に何処か既視感を覚えた。
そう、最近やったゲームがこんな感じの物語だったのだ。
両親は共に平凡で、自分の真の正体を知らない間に育った主人公。
しかし、主人公がある年齢になると迎えが来て、実は自分は世界を救う為の英雄であることが分かるのだ。
そう、確かこんな感じの物語だった気がする。
つまり、俺は――
「何を考えているか知りませんが、マグルの間から魔法使いが生まれることは稀ではありますが、なくはありませんよ。別に貴方が特別というわけではないのです」
なんだよ、ちっくしょう！
俺が落ち込んでいる姿に女性は気づくと。

「え、もしかして自分は特別だー、とか思ちゃったの？　プークスクス！　こんな平和ボケした日本人なんかに期待なんてしてませんから！　将来ヒキニート街道まっしぐらの期待なんてしてませんからー」
「ヒキニート言うな！　ちゃんと小学生やってるから！　最近ちょっと学校面倒くさいなー、休んじゃおっかなー、とか思ってたりするけど、ちゃんと通ってるから！」
「はいはい、ごめんなさいねー。あ、それよりも手紙来なかった？　ホグワーツへの入学許可書なんだけど」
　ちっとも誠意の見られない謝罪に俺がイラッとしていると、ふとそんなことを言ってきた。
　手紙？
「いや、そんなの貰ってないけど」
「あれー、おっかしいわねー。貴方が失くしたんじゃないの？　私、確かにフクロウで送った筈なのに……あ」
　ガサゴソと自分のローブの中を弄る女性の動きとはたと止まった。
「おい今、あって言わなかったか？」
「……言ってない」
「言ったろ！　人のせいにしやがって！　あんたが送ってないだけだったんだろ！」
「しょうがないじゃない！　私、これでもホグワーツで先生やってるのよ！　やることだっていっぱいあるのよ！　ちょっとくらい忘れたっていいじゃない！」
　この場に先程までの緊張感はなく、相手は明らかに年上で――しかも、先生らしい――にも関わらず、俺は既にタメ口であった。
　と言うか、あれだ。この先生、駄目な系の人だ。
「はい、じゃあ改めて手紙ね。ホグワーツ魔法魔術学校への入学許可書よ。――いい？　絶対に無くしちゃ駄目だからね？」
「あんたにだけは言われたくない」
「うっ……。ああ、そう言えば！　私、まだ自己紹介がまだだったわね！」
　こいつ、話逸らしやがった。

俺の追及の視線を逃れるべく、視線をあっちにやり、こっちにやり、終いには口笛を吹き始める目の前の女性。って、口笛上手いな！

「私の名はアクア。これでも、歴としたホグワーツ魔法魔術学校の先生よ！」

このダイアゴン横丁に魔法の杖を！

正直反対されると思っていたが、うちの両親は俺がホグワーツに行くことに対して積極的に肯定的ではなかったものの、否定はしてこなかった。

「じゃ、イギリスまで飛ぶから私に腕に捕まりなさい」

お父さんもお母さんも、どうやらこのアクアとかいう先生に懐柔されてしまったらしい。お父さんに関しては、「こんな美人な先生に教わるだなんて羨ましいぞ」なんてことを言って、お母さんに折檻されていた。

息子に何言ってんだ。

しかしだ、俺にはどうしても気になることが。

「えっと、聞きたいんですけど、向こうの言葉ってどうなるんです？俺、英語なんて喋れないんですけど」

「その辺は安心しておきなさい。この超優秀で、エリートなアクア様があなたの脳みそに魔法を掛けて一瞬で英語を習得させてあげるわ。勿論、文字だって読めるわよ？　副作用として、運が悪いと頭がパーになるかもだけど」

「今、すごいことが聞こえたんだけど。運が悪いと頭がパーになるって言ったか？」

「言ってない」

「言ったろ」

まあいい。自慢ではないが、これでもジャンケンでは負け知らずな程には運に関しては強いのだ。

俺が言われた通りアクアの腕に捕まると、何を勘違いしたのか、こちらに向かってパチンとウィンクをしてきた。

「安心しなさいな。さっきも言ったけど、私は超エリートなのよ？姿現しくらいチョチョイのチョイよ！」

……不安でしかない。

＊＊＊＊＊

「おえええええ……」
「なっさけないわねぇ。あれくらいで酔うだなんて……。……あ、ちょっと待って。うっぷ……」
「お前も吐いてんじゃねえか」
　喉元まで出掛かった酸っぱいものをなんとか飲み込み、アクアと共に街中を歩いていく。
　辺りを見回すと、アクアと同じようなローブを着た、いかにも魔法使いといった人々がたくさん。
「なあ、アクア。ここどこだ？」
「ねえねえカズマさん、忘れてるかもしれないけど、私は先生なのよ？　それであなたは生徒なの。もうちょっと敬いの気持ちを持ったらどうかしら？」
　敬われたければ、もうちょっとちゃんとしろと言いたい。
「おっ、あれ見ろよ。昼間っから、フクロウが飛んでる」
「あー、そう言えばペットも買わなきゃだったわね。カズマさんはフクロウがいいの？　ヒキニートのカズマさんにはヒキガエルの方がお似合いだと思うけど」
「ヒキニート言うな。これでもちゃんと学校通ってたんだからな、クソビッチ。引きこもりでもニートないんだ。足し算するのはやめろ」
　クソビッチ呼ばわりされたアクアが首を絞めてくるのを無視しながら、入学案内書を読み進める。
　成る程、確かに希望者はペットは飼ってもいいみたいだ。フクロウ、ヒキガエル、猫の内から選べるみたいだ。
　俺はアクアに聞こえるかどうかの声でボソッと言った。
「……カエルをデッカくしてアクアにけしかけるのもアリだな……」
「!?」

＊＊＊＊＊

　アクアに連れられ、もれ鍋とかいうパブを抜け、ダイアゴン横丁と

いう魔法使いや魔女が必要とするありとあらゆる魔法道具が売られている横丁に着いた。
そこからが大変だった。
買うものはたくさんあるというのに、アクアがあっちへふらふら、こっちへふらふらと、関係のない場所に好奇心で入りたがるものだから、一向に買い物が進まなかった。
大方の買い物を済ませる頃には、かなりの時間が経過していた。
「あと必要なのは……魔法の杖か」
「杖ならあそこのオリバンダーの店ね。私の杖もあそこで買ったのよ」
「一気に不安が増したな」
なんでよー！　と騒ぐアクアを放置しながら、〝紀元前３８２年創業〟と掲げられたその店に入っていく。
ドアについてる小さな鐘が、チリンチリンという心地よい音を立てると、程なくして店の奥から店主であろう老人が現れた。
「いらっしゃいませ。……おや、これは……もしやアクア先生、あなたが生徒の引率をなさっているので？」
「ええ、そうよ。全く、校長ったら人づかいが荒いのよねぇ。……この店はお茶はないのかしら」
「アクア先生は相変わらず冗談がお好きなようだ」
アクアの要求は冗談として取られたようだ。本人にはそのつもりはないようだが。
杖屋なんてものは初めてな俺が店内を物珍しくキョロキョロとしていると、しばらくして店主が一本の杖を持ってきた。
「杖腕はどちらで？」
「杖腕……？　利き腕なら右手ですが」
はじめに、カシの木から作られたという杖を握らされた。
「……？」
「振ってみるのよ、カズマさん」
隣のアクアからアドバイスを受け、適当に振ってみる。
が、何も起こらない。

杖の振り方が悪かったのだろうかと心配していると、今度は別のヒイラギという木から作られたという杖を握らされる。
同じように振ってみる。が、またしても何も起こらない。
「おっかしいわねー、何も起こらないなんて」
「……アクア先生、ほんとに彼は魔法使いなので？」
「……その筈、だけど」
「おいやめろ。自信なさげに言うなよ。これで、実は魔法が使えないとか、悲しすぎんだろ、おい」
目線を逸らす二人。
どうしよう、不安になってきた。
ここまで来て魔法が使えないとか、そんなお預けだけはやめて頂きたい。
「ふむ。……ならば、あっこれでいいか。レッドオークで作られた杖です」
「……なんか適当じゃありません？」
「……」
目を逸らした店主への追求を諦めて、渡された杖を振るう。
途端に、風もない家屋にも関わらず、ランプの火が仄かに揺れ始めた。
机に散らばっていた本も、パラパラとめくれていく。
「……え、ショボ」
その光景に、ふと口からそんな言葉が漏れ出てしまった。
いや、なんというか……魔法ってもっと凄い感じだろ。火が揺れるとか、本がめくれるとか……。
なんか、期待していたものと全然違った。
二人の表情を伺い見れば、同じように微妙な顔をしている。どうやら、思っていることは同じらしい。
こちらを気遣うかのように微笑んだ後、押し黙っていた店主が口を開いた。
「どうやら、その杖のようですな。いやはや、マグルに杖を押し売りしてしまったのかと……」

「……あれね。何も起こらなかったのは、カズマが絶望的に魔法の才能がなかったからね」
ポツリとアクアがとんでもないことを言ってくる。
……まあ、何にせよ。
こうして、俺の魔法世界での生活が始まったわけだ。

このホグワーツ特急に紅魔族を！

「よくよく考えたら、九と四分の三番線なんてあるわけないよな……」
俺は一人、キングズ・クロス駅で立ち尽くしていた。
周りを見れば、大荷物を抱える俺に対して、すれ違う際に怪訝な目を向ける始末。
きっと、茶髪に茶目という純日本人が、異国の駅でヒヨコを連れているという様子が珍しいのだろう。
「ピヨッ」
――この私が、入学祝いとしてこの子を貴方に預けるわ！　いい？　ちゃんと大切にするのよ？
別れ際、アクアが俺にプレゼントとしてくれたのが、このまん丸と太った黄色いヒヨコだ。
アクアは、全身を体毛に覆われたシャギードラゴンだと言い張って聞かなかったが。
名をキングスフォード・ゼルトマン。通称、ゼル帝と言う。いずれドラゴン達の帝王になる、とはアクアの言葉だ。
ただのヒヨコのくせに、随分と偉そうな名前ではあるが、一応は貰いものだから大事に飼っている。
ペットはカエル、フクロウ、猫のいずれかと書いてあったが、フクロウもヒヨコも多分同じようなもんだろう。
何か言われたら、アクアに責任転換すればいい。
まあ、そんなことよりもだ。
「ホームが全然分からん」
アクアから渡された切符には、九と四分の三番線、ホグワーツ行きとはっきり記されている。
正直、アクアが間違った切符を渡してきた可能性もなきにしもあらずだが、今更そんなことを考えても仕方がない。
と、その時だった。
「――おや、もしかしてホームが分からないのですか？」
どことなく気怠げな、眠そうな赤い瞳。

そして、黒くしっとりとした質感の、肩口までの長さの髪。
後ろから声を掛けてきたのは、学校指定の黒いローブに黒いブーツ、手には魔法使い特有の杖を持ち、黒い魔女帽子を被った、典型的な魔法使いの少女だった。
背丈は俺の首元くらいだろうか。
どう考えても、１０歳にすら満たない見た目をした、片目を眼帯で隠した小柄で細身なその少女は、突然バサッとマントを翻し、
「我が名はめぐみん！　紅魔族随一の天才にして、いずれ爆発魔法を操りし者！」
「……からかってるのか？」
「ち、ちがわい！」
少女の突然の自己紹介に思わず突っ込んでしまった俺に、その子は慌てて否定をする。
いや、めぐみんってなんだよ。
「……どうやら、あなたはマグルのようなので少し説明しておきますと、私は紅魔族という純血の一族の一員なのです。その証拠に……ほら、瞳が紅いでしょう？」
どうやら、真紅の瞳が紅魔族としての証らしい。
「ほーん。めぐみんってのは？　何かの愛称か？」
「いえ、歴とした名前ですが」
……成る程。学校のローブを着ているし、魔法使いなのは間違いないだろう。
しかし、めぐみんか……。
「……因みに、両親の名前を聞いても？」
「母はゆいゆい、父はひょいざぶろーです」
「……」
成る程、紅魔族ってのはネーミングセンスがいかれてるらしい。
思わず黙り込んだ俺に、めぐみんとやらは顔を近づけてくる。
「おい、私の両親の名前に言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」
「いや、悪い。てっきりからかってるのかと。それと、俺はサトウ・カズマだ。よろしくな。それで、九と四分の三番線のホームって知って

るか？」
「……私から言わせればあなたたちの方が変な名前をしていると思うのです。……まあ、いいでしょう。九と四分の三番線ですね？　ついてきて下さい」
そう言って、めぐみんは九番線の柱に向かって指を指した。

＊＊＊＊＊

「まさか、壁をすり抜けられるとは。魔法使いなら皆んな出来るのか？」
「いえ？　あそこが特殊なだけで、壁をすり抜ける魔法はかなり難しい筈ですよ。カズマや私が通り抜けられたのは、その切符を持っていたからです」
めぐみんが教えてくれるには、あそこだけではなく他にも隠された番線が色々とあるらしい。
紅魔族だけが住む、紅魔の里に行くにもその番線を使えば行けるのだとか。
汽車で同じコンパートメントになっためぐみんには、それから魔法界の常識などを教えてもらった。
「――ええ！　ですから、やはりカズマも私と同じ爆裂魔法を覚えるべきだと思うのですよ！　さあ、私と共に爆裂道を歩もうではありませんか！」
「ちょ、落ち、落ち着けって……！　てか、魔法なんて一回も使ったことの無い俺がそんな難しそうな魔法使えるわけないだろ」
顔を近づけるめぐみんを引き離していると、ふと、コンパートメントの扉が開いた。どうやら車内販売のようだ。
めぐみんの家は貧乏らしく、結局買ったのは好奇心に負けた俺だけであった。
「――おい、めぐみん。大変だ！　このカエル、チョコのくせに動くぞ！」
「何を当たり前のことを……あーあ、勿体ない。逃げちゃいましたね」

異物混入だ、と騒ごうとしたが、魔法界ではチョコが動くのはどうやら普通らしい。
窓の外から逃げたカエルチョコを目で追いながら、コップにさした野菜スティックをめぐみんはぽりぽりとかじっていた。
これなら大丈夫だろう、と俺も野菜スティックに手を伸ばす。
クイッ。
野菜スティックは俺の手から逃れるように、ひょいと身をかわした。
……おい。
「それにしても、ありがとうございます。カズマが買ってくれたお菓子がなければ、危うく飢え死にするところでした」
めぐみんは、コップをデコピンし、一瞬動かなくなった野菜スティックを、そのままつまむ。
「通学途中で飢え死にされたら、俺だって困るからな。こういう時はお互い様だ」
めぐみんの見よう見真似で、コップにデコピンをし、野菜スティックに手を伸ばす。
スルッ。
「……やるよ、それ」
「本当ですか!? カズマはなんと太っ腹なんでしょう! ありがとうございます!」
「誰が全部やるって言った! 野菜スティックだけだ! このロリっ子!」
「ロ、ロリっ……! この我が、ロリッ子……」
俺が買ったお菓子全部持っていこうとする、めぐみんに野菜スティック如きに舐められた怒りをぶつけていると、再びコンパートメントの扉が開いた。
「おい、一体何を騒がしている」
そう言って入って来たのは、一人の金髪の少女であった。